

「主の御先立ち」

ヨハネによる福音書 12章 12～19節

BFC（バプテスト・フェイスコミュニティー）で「ヨハネによる福音書」の学びを始めて、早 2 年が経ちました。こうして御一緒に聖書を学べることを 私自身は楽しく意味あることと感謝していますが、皆さんはいかがでしょう。聖書を学ぶというのは本当に大切なことで、実際、信仰の命綱は聖書の御言葉みことばと言って間違いないと思います。聖書がなくなったら、それはもうキリスト教の信仰ではないでしょうし、そこまでいかないにしても、聖書が軽く扱われて中身の薄い形だけのものになり始めたら、その教会はそろそろ危ない段階に入りかけていると言えるでしょう。ですので、今月も一時ひととき 静まって、聖書の語りかけに 御一緒に澄んだ耳を傾けたいと願います。

ということで、今月は その聖書のそのまた中心の「イエス・キリスト」というお方そのもののお姿に目を凝らしたいと思うのですが、初めにまず「クイズ」から始めたいと思います。ごくごく簡単なクイズですので、聖書に馴染みの薄い方でもなんということはありません。第 1 問は、キリスト教会で一番よく知られた、教会の暦こよみで最も広く行なわれている行事といたら、それは何でしょうか。誰もがよく知る「クリスマス」ですね。クリスマスが近くなると、毎年、心がどこか浮き浮きしてきて、「ちょっとすてきなクリスマスにできたら」と待ち遠しくなります。今年のクリスマスははたして、どんなになるのでしょうか。楽しみですね。そして、それとともに、それに先立ってやって来るのが・・・？ 「アドヴェント（待降節）」ですね。神の御子みこイエス・キリストの御降誕を心待ちにする時として、教会では これも大切にまもっています。カレンダーで言うと、11 月の 30 日に一番近い日曜日からイヴの 24 日までの期間が この「アドヴェント」に当たります。では、第 2 問です。クリスマスに次いで有名な教会の暦といたら、どうでしょうか。たまに、神の聖霊が降ったという「ペンテコステ（聖霊降臨日）」の日を挙げる人もいますが、これはまあ 3 番目になるのでしょうか。2 番目は、普通は、イエス・キリストの復活を記念してお祝いする「イースター（復活祭）」かと思います。では、それと関連して 第 3 問ですが、その直前の 1 週間を何と呼ぶでしょうか。「受難週」ですね。十字架へと向かわれるイエス・キリストの最後の受難を憶えて感謝する時です。今年は、今月・4 月の 14 日の週がこの「受難週」になります。そして、その翌週の 4 月 21 日（日）が今年度の「イースター」となるわけです。ですので、その前の 1 週間、4 月の 14 日（日）から 20 日（土）までが受難週ということ。それでは、最後のクイズです。では、その受難週はどんな出来事から始まったのでしょうか。いかがでしょう？ もうお気づきでしょうか。イエス・キリストがついに、最後のエルサレムとして、そこにお入りになられる。すると、手に手に「なつめやしの枝」(13) を持って これを打ち振る大勢おおぜいの群衆に歓呼して迎えられるという、そのような光景

からでした。今回の聖書の箇所です。日本の教会ではこれまで、この日曜日を「棕櫚の主日」と呼んできました。というのも、以前の文語訳聖書と口語訳聖書が共に、「なつめやしの枝」ではなく「しゅろの枝」と訳していたためです。ですが 現地の実情からすると、実際のところはどうやら「なつめ椰子」のほうが正確なようで、それで 現在の新共同訳では「なつめやしの枝」というふうに変えられています。それはそれとして、今月の箇所は、主イエスがそのようにして 人々の歓呼を受けながらエルサレムに入城される、まさにその時であるわけです。イエス・キリストにとって、最後のエルサレムです。そして、あとわずか 5 日先に「十字架」が待ち受けている。そんな緊迫の時の始まりであり、イエス様の生涯の 文字どおり「クライマックス」の瞬間がすぐそこにまで迫っている時でした。

今月・4 月は今年度の「イースター」の月であり、それに先立つ「受難週」の月ともなっています。ですので、今回は通常の順序を変え、受難週第一日の場面から 聖書の語りかけに聴いていきたいと思えます。

それにしても、イエス様はその生涯をどんな思いで歩まれたのだろうか。とりわけ この最後の 1 週は、どんな思いで その一足ひと足を進められたのだろうか。私はそう思わされてなりません。とてもじゃない、私たちの想像などには余ることのように思われますが、同じような思いで聖書の舞台を訪ね、イスラエルの各地を歩かれた方がおられます。茂 洋^{しげろひろし} という先生で、神戸女学院大学で教えられ、日本基督教団で牧師も務められた方です。その茂^{しげる} 先生が、こんなふうに述べておられます。「イスラエル 2 か月の生活は 今も生々しい印象を残しています。その間、できるだけイエスの歩かれたであろう道を訪ねつつ 歩き回りました。宿に戻っては聖書と地図を広げ、そこで イエスは何を語られたか、何をされたか、そして それらは何を意味したかと思い巡らし、また次の日には 新しい思いでイエスの足跡^{あしあと}を訪ねるといった日々でした。イエスの生涯の順序に従って現地を踏みしめつつ、その意味を問い直した月日はアツという間に過ぎてしまいました。エルサレムへの旅を決心されたイエスはどのような気持ちで町々を訪ね、そして教えられたのかとか、いよいよエルサレムに向かうときはどのような思いだったのかと考えながら歩いたものでした。エルサレムでの最後の 1 週間はどのように過ごされたのかと想像することも 興味あることでした」。先生はそうにして、この時の調査や御経験をまとめ、『捨てられた石』と題して出版しておられますが、主イエスの思いに心を寄せられたお気持ちは この私にも分かるような気がします。

というわけで 今月は、一方で イエス・キリストの思いに深く心を寄せる。また一方で、主イエス^{えり}がその思いを向けてくださっている、すなわち 主イエスのその思いを襟を正して受け止めるべきこの私たちの思いをも振り返る。そのようにしながら 聖書のメッセージに耳を澄ませたいと願っています。

そもそも、エルサレムに入城される前後のイエス様の足取りはどんなものだったのでしょうか。そ

れをちょっと見ておきましょう。それは、次のようなものでした。まず、御自分の命を狙うユダヤの当局者の手を逃れ、「エフライム」という町に退避しておられました。少し前の 11 章 54 節に記されています。そこから「エリコ」という町を通過して、かつて知った「ベタニア」という村に立ち寄られます。マルタ、マリア、ラザロという主イエスが親しくされた一家の暮らす村で、12 章の初めにそのときの様子が描かれています。そして、イエス様はそこから、最終的に「エルサレム」へと向かわれるわけです。簡単にまとめますと、退避先のエフライムからエリコを通過して、ベタニア経由でエルサレムに入城されたということです。このうちの エリコからベタニアを経てエルサレムへと通じる道について、先ほどの茂先生が次のように記しておられます。「〔それは〕きつい上り坂を意味します。エリコは海面下 300 メートル、そこから海拔 800 メートルのエルサレムまでを、直線距離にして約 25 キロメートルで上るのです。ですから、1,100 メートルの山を約 25 キロから 30 キロの距離で上ると同じこととなります。しかも、その間、全くの荒地〔もあります〕。昔の道に入って歩いてみると、並大抵のことではないことを実感します。イエスは、エリコからエルサレムへ上る最後の旅を始めたのです。どんな心中だったでしょうか」。ベタニアはこの途中、上り道がほぼ終わり近くになったところにある村で、緑豊かな美しい場所だったといえます。エルサレムまであと 3 キロほどのところにあり、イエス・キリストは最後の一週を、こことエルサレムとの間を行き来して過ごされたと考えられています。

そのようにして、主イエスはついに、エルサレムに入られたのでした。するとそこで、どんな光景が繰り広げられたのでしょうか。今月の 12～13 節にあるように、「大勢の群集がなつめやしの枝を持って出迎えた」というのです。エルサレムでは、お祝いの行事など公の祝賀の折に、なつめ椰子の枝がよく使われたようです。人々はイエス・キリストの入城を、心躍る喜ばしくて大いなることとして、沸き立って迎えたのでした。

そこには、2 種類の人たちが見受けられます。片や、元からエルサレムにいた人たちです。この人たちは少し前に、ある事件を見たり聞いたりしていました。イエス・キリストが先ほども名前の出たラザロという大切な友人を墓の中から呼び出されたという出来事です。その彼らのところに、各地から次々と巡礼の者たちが到着してくる。そしてそれらの巡礼者たちに、エルサレムに住む最初の人々が心を高ぶらせて、主イエスとラザロのことをまた話して聞かせるわけです。このようにして、2 つの群衆が一つになり、心をますます高揚させて、イエス様をエルサレムに迎え入れたのではないのでしょうか。なかには、ベタニアから、主イエスについて一緒に来た者たちもいたにちがひありません。ここで言う「祭り」というのは、12 章の書き出しに記されていますが、「過ぎ越しの祭り（過越祭）」と呼ばれるお祭りです。詳しい説明は省きますが、この祭りのときには、あちこち各地から 15 万人余りもの巡礼者がエルサレムにやってきたと言われています。ですから、実際「大勢の群衆」が迎えに出たことは間違いのないと思われまふ。さぞや興奮に満ちた、期待と熱気に溢れた、騒然とした光景だったのではないのでしょうか。

けれども、人々の尋常でないこの盛り上がりを見れば見るほど、その一方で逆に なんととも複雑で

割り切れない思いにさせられるのは、はたしてこの私だけでしょうか。どういうことかという、普通でないこのような興奮の渦が広がった そのなんとわずか 5 日後に、これと全く正反対のもう一つの尋常でない出来事が 同じ人々によって引き起こされるからです。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に！」と 13 節でそのように叫び、大騒ぎをしてイエス・キリストを迎えた その同じ人々が、この後^{あと} わずか 5 日足らずのうちに、こんどは「そいつを十字架につけろ！」と叫んで、そして 本当にそのようにしてしまう。自分たちの「王」とまで言って持ち上げておいて、しかし、そのすぐ後^{あと}に その王を殺してしまうのです。ちなみに、今回の「棕櫚の主日」の日曜日から十字架の当日の金曜日まで、全体を通してわずか 6 日間です。なのに、そのわずか 6 日間の出来事を、お気づきでしょうか。ヨハネは自分の福音書の三分の一以上のページを割いて、丁寧に丁寧に、そして執拗^{しつよう}に書き留めています。「ヨハネによる福音書」は全体で 21 章ですが、そのうちの 12 章から 19 章までがすべて、受難週の このわずか 6 日間の出来事に当てられているのです。21 章のうちの 8 章です。凄いことではないでしょうか。きっと、ここにこそ、私たち・人間の隠すことのできない裸の姿と そんな私たちを救い上げようとしてくださるイエス・キリストの揺るぎない決意とが示されているからではないでしょうか。

「ホサナ」とは、元々は「今こそ、救い給え！」という意味の言葉です。また、「主の名によって来られる方」という言い方は、「メシア」として、つまり「救い主」として来られる方に捧げられた 一種の称号でもありました。さらには、「イスラエルの王」というのもまた、同じように「メシア（救い主）」を表わす そのような意味合いの込められた呼び方でした。群衆はそれほどまでに気持ちを高揚させ、歓喜の声をあげて 主イエスを迎えたのでした。けれども、よく言われます。やはり、「愛と憎しみとは紙一重で、コインの裏表のようなもの」ということなのでしょう。群衆は移り気で、気まぐれでした。どこか、私たちの現実と重なるようにも思われます。今月の聖書も、人々が大挙して主イエスを迎えたのは「イエスがラザロを・・・死者の中からよみがえらせた」からであり、「イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたからである」と、17 節、18 節でそのように説明しています。つまり、人々は、自分たちに利益をもたらす目に見える具体的な力や奇跡や御利益^{ごりやく}を期待して、求めて、イエスを持ち上げたということです。そのようにして 群衆は、祖国イスラエルをローマ帝国の支配から具体的に解放してくれる「力の救い主」を求めたのでした。イエス・キリストと人々との間に、容易には埋められない深い溝が広がっていったと思います。その溝が人々に「期待外れ」の思いを抱かせた。そして、拳^{こぶし}を振り上げず、力を示すことなく、ひたすら十字架へ十字架へと進んでいくそのイエスに、彼らはすっかり幻滅させられたのでしょう。彼らの最後の言葉、それはどんなものだったのでしょうか。「殺せ。殺せ。〔イエスを〕十字架につけろ」（ヨハネ 19：15）。それが、彼らの行き着いた先でした。19 章の 15 節に記されています。茂先生はこの時の主イエスの心情を想い描いて、こう記しておられます。「イエスのエルサレム入場の真^{しん}の意味を〔人々は〕理解していませんでした。ルカによる福音書によれば、ここでイエスは涙を流して泣かれました（ルカ 19：41）。ゲッセマネの園のすぐ上のところに、『イエス涙流し給う』という名の教会堂がありました。周りの

群衆の王歓迎という華やかさに比べて、イエスが示そうとされている王の意味は、驚くほど静かで謙虚なものでした。・・・イエスはここで全くの孤独でした。彼は孤独のまま、死に至る道を歩いてゆかれました」。そう述べておられます。しかし、私は思われます。「自分は違うさ。この自分は、こんな群衆のようにいい加減じゃない」。そう思ったがるし、どうも そう思っているふしがないとも言えない。でも、静まって もう一度 深く省みると、自分もまた、むしろ この群衆と決して遠くないことに気づかされます。この自分もまた、群衆たちの中にいたのではないか。改めて、そう気づかされるからです。

当てにならない信仰心と言いましょか。移り気で気まぐれな こうした群衆の姿を目にするとき、また同じような自分自身の姿を目にするとき、いつも思いを向けさせられるのは、それとは逆のように見える人たちのことです。すなわち、例えば、世界的にもそれこそ奇跡的と言われている「隠れキリシタン」の人たちのことです。福岡に暮らす私と妻は、外国の友だちなどが来た場合、必ず 2 つの場所に案内することになっています。どこだと思われるでしょうか。どちらも長崎のよく知られた場所ですが、一つは「原爆資料館」です。外国の人たちは、原爆を投下した その当事者であるアメリカの人々も含め、原爆の実態をほとんど知りません。ですから、資料館に案内すると、彼らは本当に驚き、なにがしかのを感じ取って、学習して帰っていきます。そんな小さなことでも、お互いの相互理解と国際平和の後押し^{あとお}に少しでも役立てばと願って、そうしています。

そして もう一つの所は、これも 皆さん御存じでしょうか。長崎市郊外の「外海^{そとめ}」と呼ばれる地域です。「外の海」と書いて、「そとめ」と読みます。そこは 遠藤周作さんのあの有名な小説『沈黙』の舞台とされたところで、実は、私たちの思い入れの深い場所ともなっています。海に面する突端のところに、「遠藤周作文学記念館」が建てられています。眼下には、真^まっ青^きな海が美しく広がっている。その海を見ていると、「この岸辺で彼らは十字架につけられ、満ち潮の中に葬られたのか。この青い海を渡って、彼らは向こうの 遠い五島の島々にまで逃げていったのか」と、そんな思いにさせられます。そのほかにも、外海地域には隠れキリシタンの史跡がいくつも残っています。その中で、私たちが何はさて置いても、お客さんを忘れずに連れていくのが「枯松神社^{かれまつ}」という場所です。「枯れた松」と書く神社です。なぜかといいますと、御存じでしょうか。この神社は日本に 3 つしかない「キリシタン神社」の、その一つだからです。神社と銘打っているわけですから、たたずまいはもちろん、神社のそれです。しかし、正面の扉^{こうし}の格子から中を覗^{のぞ}き、暗い中にある奥の方を見てみると、そこに何やら 十字架らしき 印^{しるし}の書き込まれた掛け布^{かぬの}のようなものが飾られている。そんな 神社に似せて造られた、彼ら「隠れ」の集会場所、礼拝場所だったわけです。神社は、小高い山の中腹の鬱蒼^{うつそう}とした森の中に、どこからも見えないように、かくまわれるようにして建てられています。正確には、建てられていました。現在では、観光用に周りの木々が伐採され、行く道も舗装され、駐車場まで整備されて、少しばかりつまらないものになってしまいましたが、十数年前までは確かに 当時の面影^{おもかげ}が残されていたのを覚えています。ちなみに、神社の建物を取り囲む地面を見ると、何枚もの石の板が目につきます。しかも、あるものには明らかに、目立たな

いようにその表面に彫りつけられた「十字架」の印^{しるし}が見て取れます。板の下には、信仰をもって召されていった隠れの人たちが葬られているということです。13年ほど前、妻の恩師がアメリカから来られ、この枯松神社をはじめとする隠れキリシタンの史跡をあちこち案内したとき、その先生がしみじみと^{つぶや}呟いておられました。「こんなところに身を潜めて分け入って、こんなところを裸足^{はだし}で逃げ回ったのよね」。道なき道をかき分け、身を潜めて山の中に入る。神社に着いても息を潜めて折り合い、互いの安否を確認し合ったにちがひありません。隠れキリシタンのこうした姿を目にするとき、私はいつも思わされます。「何がそこまで彼らを支え、彼らを力づけたのだろうか」。たしかに、よく言われるように、この世で生きることが地獄のように苦しいものだったから、だから、彼らはあの世にパラダイスを求めたのかもしれない。その苦しさ在必死さが彼らに迫害を耐えさせたのかもしれませんが。ですが、ただ単にそれだけだったとは、私にはどこか思えないのです。そう思うのはもしかすると、この私たちのごまかしや合理化から来ているのかもしれない。自分自身の言い訳の一つにするために、私たちはそう考えた^いいのかもしれない。そんなふう^いに思わされることがあります。彼らは、「聖なる」とでも言うべき、この私たちのあれこれを越えた神様の特別な何かに触れていたのかもしれない。それをどこかで感じ取っていたのかもしれないと、そう思わされるからです。

聖書の信仰にとって、その中心は十字架のイエス・キリスト、そのお方にほかなりません。隠れキリシタンの人々にはたしかに、マリア信仰^{うんぬん}云々ということがありました。しかし、彼らもまた、十字架のイエズスを礼拝し、十字架のイエズスに心を注ぎ出しました。遠藤さんの『沈黙』ではいわゆる「踏み絵」が大きな役割を果たしていますが、そこに^{はこ}嵌め込まれているのも^{いぼら}茨の^{かんむり}冠をかぶった主イエスの顔です。その踏み絵を、ロドリゴという宣教師がついに踏んで、転んでしまう。そのとき、踏み絵を前にして、ロドリゴは心にこう叫びます。「痛い。心が痛い。あなたを踏む足が痛い」。読む者の心を揺さぶる場面です。ロドリゴもまた、そのようにして、十字架のイエス様と向き合ったのでした。私たちもまた、十字架に触れて初めて、イエス・キリストの思いが分かり、そのお心が分かってくるのではないのでしょうか。十字架が分かって初めて、聖書の神様への信仰というものが分かってくるように思います。今月の聖書も、16節でこう言っています。「弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した」。「イエスが栄光を受けられたとき」というのは、ヨハネによる福音書では「主イエスが十字架につけられたとき」ということです。要するに、弟子たちもまた、イエス様のことや信仰のことが初めはよく分からなかった。それが分かり始めたのは、イエス様が十字架にかけられた^{あと}その後だったというのです。十字架が分かって、十字架の主が分かって初めて、大事なことが分かってくる。イエス・キリストとはどんな王なのか、どんな救い主なのか分かってくるということです。それは「ろばの子」に乗られる王であり、軍馬には乗られない救い主です。力や武器によって従わせるようなことはしない「平和の王」であり、慈しみをもって人々に仕えて救う「柔和な救い主」です。それこそが本当の救い主の姿なのだということが、十字架の上にその深い愛と恵みとを見るまでは、

弟子たちにも分からなかった。しかし、^{あと}後になって そのことを理解したとき、そのようにしてまで自分たちにすべてを献げてくれた そのイエス・キリストに、彼らもまた、すべてを献げて仕えていったのでした。その同じ主を、私たちもまた 同じように頂いているとしたなら、なんと感謝なことなのでしょうか。私は、そう思わされています。

終わりに、あと一つ。いま一つ ^ふ腑に落ちない、妙に感じる点について、です。しかも、そこにこそ 主イエスが届けてくれた「救いの福音」の全体がかかっている そのような点について、御一緒に考えておきたいと思います。これを忘れて抜かしたら、今月の学びも ^{うわ}上^{つら}っ面だけの気持ちの信仰、フィーリングの信仰、気の持ちようのようなもので終わってしまうように思われます。どういうことかという、こんな疑問です。「それにしても なぜ、イエス様はそんないい加減な群衆の歓迎を受け入れられたのだろうか。移り気な彼らの ^{ほんしょう}本性を見抜けなかったのだろうか」。そんな、なんとも腑に落ちない割り切れなさです。実際、ヨハネによる福音書には、次のような言葉がよく見られます。「それで、多くの人々がイエスを信じた」「多くのユダヤ人がイエスを信じるようになった」「信じた」「信じた」「信じた」と、一度や二度ではありません。何度も記されています。なのに 彼らは、これまた同じように、繰り返し くつついたり離れたり。イエス・キリストのもとにきちんと^{とど}留まりません。そのことは、イエス様御自身 ^ま目の^あ当たり^りにしてこられたのですから、誰よりもよく分かっておられたはずです。事実、2章の終わりを見ると、ヨハネはすでに冒頭から、こう書き出しています。「イエス御自身は・・・すべての人のことを知っておられ・・・何が人間の心の中にあるかをよく知っておられた」(2:24~25)。そうであれば、イエス様は、この時の群衆の移り気も気まぐれなフィーリングも御存じだったはずで、にもかかわらず、そんな彼らの当てにならない歓声の中に 何も言わずに入ってゆかれます。わずか5日後に、この彼らによって十字架へと追いやられるのを御存じのうえで、黙って そのただ中に踏み入ってゆかれる。いったい、どういうことなのでしょうか。

それは、恵みの神様がその御子イエス・キリストにあつて、私たちの貧しさや恥知らずを^{けち}蹴散らすようにして、先回りして「良きもの」を備えてくださったということではないでしょうか。ある人はこれを、「神が先手を打たれた」という言い方で言い表わしています。この私たちは気まぐれでいい加減で、当てにならない者でありながら、それでも イエス・キリストは先回りし、先手を打って、私たちが立ち返るべきそのところを用意してくださろうとした。だからこそ 主イエスは、心変わりしてソッポを向かれ、裏切られて捨てられるのを分かっている、そうであってもなお そんな私たちの思いを突き破って、ひたすら御自身の道を進まれたのではないか。そう言われるのです。私たちのため、立ち戻るべき良き場所を用意するためにそうしてくださったのではないかと、そう言われるのです。今月は この拙文のタイトルを「主の御先立ち」とさせていただきましたが、これもまた、聖書の信仰の 同じような真理を言い表わしたものです。なかには、この言葉を手紙の初めに記される方もおられます。すなわち、クリスチャンは普通、「主の^{みな}御名を賛美いたします」というような言葉で手紙を書き出すことが多いかと思いますが、その方たちは代わりに、例えば「アーメ

ン、主の御先立ち」というふうにしてこの表現を使われます。私が以前、教会の特別集会の講師にお招きした先生のお一人も、その折に頂いたお手紙の冒頭にこの言葉を記しておられました。他にも同じように、「アーメン、主の御先立ち」と書状や文章の書き出しを始められる方々を知っています。これは直接には、葬られたイエス様の遺体に油を塗るためにお墓に向いたその女性たちに向かって告げられた言葉から来ているようです。そのとき、女性たちに向かって、白い衣を着た若者がこう告げます。「あの方〔主イエス〕は復活なさって、ここにはおられない。あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお目にかかれる」(マルコ 16:6~7)。つまりここでも、墓が空っぽなのを見て、いったい何が起こったのか分からずに慌てふためくその女性たちに向かって、こう言われているのです。「驚くことはない。主イエスはあなたがたより先回りして、あなたがたに先立ってあなたがたのガリラヤに行って待っていてくださる。そこで、あなたがたに親しく見えてくださる。そのようにして、先々の備えをしていてくださる。だから、恐れることはない。怯えることはない」。女性たちの思いに先立って、神様はそう言ってくださっている。「アーメン、主の御先立ち」という言葉にはさらに教派神学的な背景もあるようですが、いずれにせよそのようにして、自分勝手に移り気でずうずうしくて当てにならないこの私たちに対してもまた、神様は同じように言ってくださっている。私たちの至らなさに先立って、先々の備えをしていてくださると、御子イエス・キリストを通してそうおっしゃってくださっているのではないのでしょうか。「主の御先立ち」とは、そのような恵みの言葉にほかなりません。イエス様は群衆の、人々の、またこの私たちのいい加減さを知ってのうえで、それでもなお先立って、十字架に進んでゆかれた。そして、御自身を献げ切って、私たちの帰るべきところを用意してくださったのでした。慈しみをもって、この私たちに伴い立ってくださるからです。とするならば、あまり信用できないこの私たちであっても、神様はなおどこかでこの私たちに信頼し、期待して下さっているということなのかもしれません。なんとうれしく、感謝なことではないのでしょうか。

これが、最後のエルサレムに入城された、今月のイエス・キリストのお姿でした。これが、主イエスのお心ではなかったのでしょうか。そして、私たちがもし、イエス・キリストのこのお姿とこのお心とにいくらかなりとも本当に気づいて、それらに触れたとしたなら、そのとき、私たちはとてもいい加減ではいられなくなる。自分に都合のいいように甘えて、言い訳を言って、ノホホンなどしてはいられなくなるのではないのでしょうか。ましてや、「どうせ救ってもらえるんだから」などと言えようはずがありません。以前御紹介した清水恵三先生言葉を覚えておられるのでしょうか。「そう思ったとたんに、感謝の思いがぞくぞくと湧いてきて、何かしたくなってくる」と、清水先生はそうおっしゃっておられました。ありがたさに押し出されるからです。

イエス・キリストがこの私たちのために、最後のエルサレムへと踏み入ってゆかれます。私たちのいい加減さを充分御存じのうえで、それでもなお、十字架へと進んでいってくださいます。そのこ

とを知れば知るほど、私たちは、このキリストと共に葬られることをはしよらないようにしたいと思います。イエス様と一緒に、十字架の上で情けのない自分に死ぬことをはしよらないでいたいと思います。バプテスマを受けるとき、私たちは 水から引き上げられて新しいのちへと生かされる前に、その前にまず、水に沈められます。キリストと共に水に沈んで、そこで 貧しい自分に死ぬからです。そのことを忘れることなく、イエス様の下さる恵みに感謝し、その恵みにあずかりたいと思います。イエス・キリストはきっと、先手を打って、私たちに良きものを用意してくださっているにちがひありません。そのようにして、私たちに伴ってください、御旨のある良きところへと一人ひとりを、また御自身の群れを連れ行ってくださると信じています。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたの御子イエス・キリストの十字架に触れるたびに、我が身のずうずうしさを憶えます。調子のよさを憶え、恥ずかしさを憶えます。情けなさを憶え、至らなさを憶えます。そして、罪の深さを憶えます。

どうか、私たちのすべてに先立って用意してくださった その十字架を取り去らないでください。私たちの前に立たせ続けてくださいますように。そして、この私たちをその恵みにあずからせてください。

不十分で至らないながらも、私たちは少しでも偽りのない 深い感謝の心をもって、御子の入城をそれぞれの内に迎え入れたいと願います。どうか、それを良しとし、私たちに伴い立ってくださいますように。その恵みの中を、いつも歩ませ続けてください。

御子の十字架へと 思いを真つすぐに向けさせ、その慈しみを深く味わわせてくださいますように。主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン